立正大学博物館年報

13

平成 26（2014）年度

立正大学博物館

序

平成26年は、大正13年に設立された立正大学の90周年であり、さらには立正大学拡充の一環として熊谷校地に設立された法学部が品川校地に移転を開始した年であった。これを記念して企画展示では「立正大学のあゆみⅡ」を開催した。関東最古の伝統を誇る仏教系の大学としての矜持を保って、立正の名声をより一層宣揚したいものである。

特別展示は、立正大学博物館所蔵資料の特徴の一つとなっている仏教系遺物を取り上げて、日蓮宗・善性寺境内墓地の改葬にともなって出土した越智松平家墓所出土の資料を中心として、江戸時代の墓誌を扱った。越智松平家は、6代将軍家宣の弟の松平清武に始まる親藩であり、上野国館林藩のち石見国浜田藩の藩主家として続いた。越智松平家の墓誌は、特定の家により採用された墓誌の実態が分かる貴重な資料群である。

平成26年度の博物館業務は企画展示・特別展示・博物館実習の受け入れなど基本業務は行ったが、館蔵資料の整理事業を主体的に行ったために、資料研究が十分ではなかった点が反省させられる。今後に、陣容を刷新してあたりたい。

平成27年3月

博物館長　池上　悟

目　次

序
目次
Ⅰ．博物館の概要……（2）
（1）組織と職員
（2）立正大学組織表
（3）立正大学博物館規定
（4）立正大学博物館細則
（5）施　設
Ⅱ．事業報告……（8）
（1）開館日数・入館者数
（2）出　版
（3）資料活用
（4）展　示
（5）教育普及
（6）調査・研究
Ⅲ．受贈図書目録……（20）

Ⅰ．博物館の概要

（1）組織と職員

a．職員

館　長　　池上　悟　　事務嘱託　　上山豊明

専門職員　　池田奈緒子

b．運営委員

第１号委員

池上　悟（博物館長・文学部教授）

第２号委員

池田奈緒子（専門職員・非常勤嘱託）

第３号委員

舟橋　哲（法学部長・法学部教授）

松井秀郎（地球環境科学部長・地球環境科学部教授）

第４号委員

小畑二郎（経済研究所長・経済学部教授）

山口忠利（社会福祉研究所長・社会福祉学部教授）

第５号委員

安田治樹（博物館関係学識経験者・仏教学部教授）

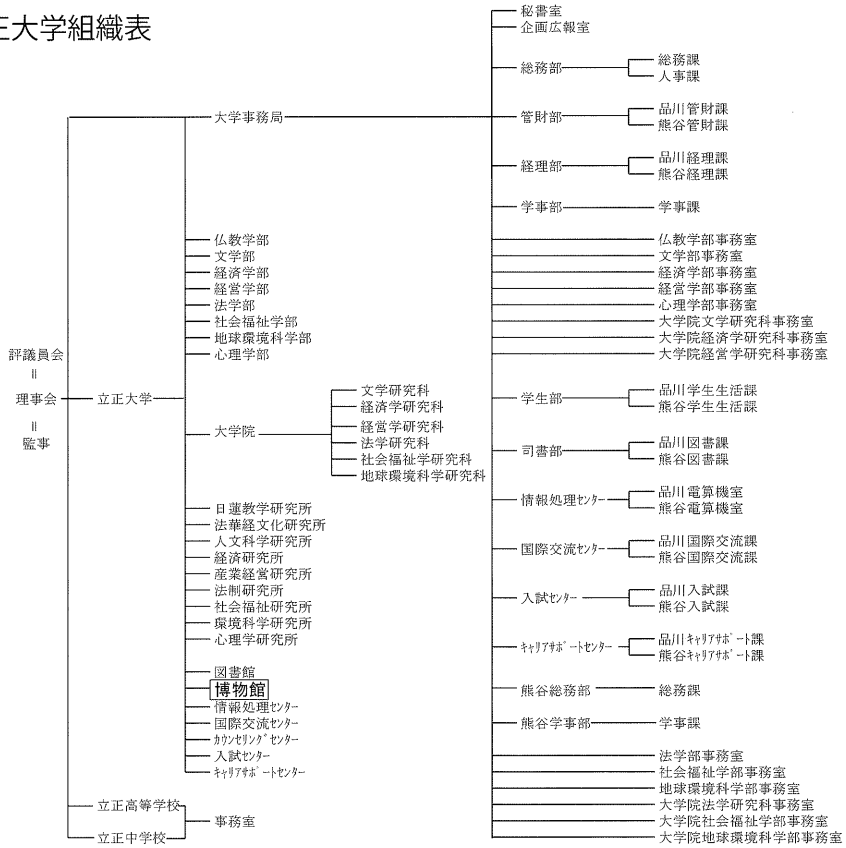
第６号委員

野沢佳美（文化史関係学識経験者・文学部教授）

第７号委員

川野良信（自然誌関係学識経験者・地球環境科学部教授）

（2）立正大学組織表



(3) 立正大学博物館規定

（設定）

第１条　立正大学学則第９条の規定に基づき、熊谷キャンパスに「立正大学博物館」（以下「博物館」という）を置く。

（目的）

第２条　博物館は歴史・芸術・民俗・産業・自然誌に関する学術的資料（以下「資料等」という）を収集、保管し、これを組織的に展示し、広く社会に公開するとともに、これらの調査研究を行うことによって大学における教育・研究の発展に寄与することを目的とする。

（事業）

第３条　博物館は前条に規定する目的を達成するため、次の事業を行う。

一　資料等の収集、整理および保管
二　資料等の展示および公開
三　調査研究活動
四　調査研究成果の発表および出版
五　本学における博物館学芸員課程関係科目、その他関係授業科目の教育活動への協力
六　講演会、講習会および特別展示会の開催
七　その他必要な事業

（職員）

第４条　博物館に次の職員を置く。

一　館長
二　専門職員

（館長）

第５条　博物館に館長を置く。

２　館長は博物館を代表し、博物館の業務を総括する。

３　館長は全学協議会に諮り、本学専任教職員より学長が任命する。

４　館長の任期は３年とし、再任を妨げない。

５　館長が欠けたときは、補充しなければならない。この場合において、その任期は前任者の残任期間とする。

（専門職員）

第６条　専門職員は第３条に定める事業に従事するとともに、これに関連する業務を行う。

２　専門職員は博物館学芸員の資格を有するものとし、任期は３年とする。

（運営委員会）

第７条　博物館の管理運営に必要な事項を審議するため、博物館運営委員会（以下「委員会」という）を置く。

（委員会・構成）

第８条　委員会は、次の者を以って構成し、学長が委嘱する。

一　館長
二　専門職員
三　学部長から２名
四　研究所長から２名
五　博物館学芸員関係学識経験者から１名
六　考古学および文化史関係学識経験者から１名
七　自然誌関係学識経験者から１名

２　館長の推薦により、前項に定める委員会のほか、学識経験者若干名を加えることができる。学識経験者委員の委嘱は学長が行う。

３　委員会が必要と認めたときは、委員以外の者に出席を求め、意見を聴く

ことができる。

（委員の任期）

第９条　前条第三号乃至六号および第２項の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

２　任期中に欠員が生じた場合は、委員を補充し、任期は前任者の残任期間とする。

（委員会の運営）

第10条　委員会は、館長が召集し、議長となる。

２　委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は出席委員の過半数の同意をもって決する。

（委員会の審議事項）

第11条　委員会は、以下の事項について審議する。

一　資料等の収集、整理、保管、展示および公開に関する事項

二　博物館の管理運営に関する事項

三　調査研究活動ならびにその成果の発表および出版に関する事項

四　博物館関係科目、その他関連授業科目の教育活動への協力に関する事項

五　博物館の予算・決算に関する事項

六　その他必要な事業に関する事

（細則）

第12条　この規定に定めるもののほか、管理運営上必要な事項は、立正大学博物館規定細則によるものとする。

（規程の改廃）

第13条　本規程の改廃は委員会および全学協議会の議を経るものとする。

附則

この規程は平成14年４月１日から施行する。

(4) 立正大学博物館細則

（趣旨）

第１条　この細則は立正大学博物館規程第12条の規定に基づき、同規程の施行について必要な事項を定めるものとする。

（開館日）

第２条　立正大学博物館（以下「博物館」という）の開館日は原則として立正大学学則第31条に定める休業日および火曜日を除く日とする。

（開館時間）

第３条　博物館の開館時間は、午前10時から午後４時までとする。

（入館手続）

第４条　博物館に入館する者は、所定の手続きをとらなければならない。

２　館長は博物館における教育および研究活動に支障があると認める場合は、入館を許可しないことがある。

（入館料）

第５条　博物館の入館料は原則として無料とする。

（入館者の義務）

第６条　入館者は博物館の施設・資料等を毀損し、または滅失したときは、直ちに館長に届け出て、その指示に従わ

なければならない。

2　入館者は前項の規定にある損害に対し損害賠償の義務を負わなければならない。ただし、事情によりこれを免除または軽減することができる。

（資料等の利用）

第７条　博物館内において撮影、実測、特殊観察、複製製作の目的で資料等の利用を希望する者は、館内利用許可申請書を館長に提出し、その許可を受けなければならない。

2　資料の所蔵者または寄託者が学外にある場合は、当該資料の利用を希望する者は事前に所蔵者または寄託者の承認を受け、それを証明する書類を利用許可申請書に添付しなければならない。

3　利用を許可された者は次に掲げる事項を遵守しなければならない。

一　利用に際しては博物館の専門職員の支持に従うこと。

二　利用による成果を刊行物、映画フィルム、ビデオテープ等に発表したときは、本博物館の名称およびその所蔵、または保管である旨を明記すること。

三　利用により生じた著作物等は利用許可申請書に記載の目的以外には使用しないこと。

四　館長は、第１項の利用許可申請書の提出があったときは、審査のうえ館内利用許可書を交付する。ただし、重要文化財およびこれに準ずる資料等については、立正大学博物館運営委員会（以下「委員会」という）の議を経なければならない。なお、館長は管理上支障があると判断した場合は、許可を取り消すことができる。

五　本条第１項による利用許可を受けた者が、当該資料を毀損した場合は、損害賠償の義務を負わなければならない。

（資料等の利用料金）

第８条　前条第３項により許可を受けた者は、別に定める利用料金を速やかに経理部に納入しなければならない。

2　館長は、前項の定めにかかわらず次の各号のいずれかに該当する場合は、利用料金を全額免除することができる。

一　各種教育機関や国または地方公共団体および公益法人が行う教育、学術および文化等に関する事業

二　博物館法（昭和26年法律第285号）に規定する博物館等の行う事業

三　学術研究

四　前号のほか、館長が全額免除すべき特別の理由があると認めたとき

3　前項の定めにより利用料金を全額免除された者は、利用により生じた著作物１部以上を無償で博物館に納入しなければならない。ただし、館長が認めたときはこの限りでない。

（資料等の貸出）

第９条　資料などの貸出を受けようとする者は、館外貸出許可申請書を館長に提出し、その許可を受けなければならない。

2　館長は前項の貸出許可申請書の提出があったときは、審査のうえ館外貸出許可書を交付する。ただし、重要文化財およびこれに準ずる資料等については、委員会の議を経て決定しなければならない。

3　館長は管理上支障があると認められる場合は、前項の許可を取り消すことができる。

4　本条第 1 項による許可を受けた者は、貸出期間中に当該資料等を毀損または滅失した場合は、損害賠償の義務を負わなければならない。

（資料等の貸出料金）

第10条　前条第 2 項による許可を受けた者は、別に定める利用料金を速やかに経理部に納入するとともに、貸出期間中および貸出に伴うすべての経費を負担するものとする。

2　前項の定めにかかわらず、第 8 条第 2 項一号、二号および四号のいずれかに該当する場合は、貸出料金を全額免除する。

3　前項の定めにより貸出利用料金を全額免除された者は、利用により生じた著作物を 1 部以上、博物館に寄贈しなければならない。ただし、館長が特に認めたときはこの限りでない。

（寄託）

第11条　資料等を寄贈・寄託しようとする者は、その品目、点数、期間等を寄贈申請書・寄託申込書に記入のうえ、館長に提出するものとする。

2　館長は前項に定める寄贈・寄託の申出があった時は、委員会の審議に附し、受入の承認がなされたものについて、学長に意見書を提出しなければならない。

3　館長は寄贈・寄託を受けた時は、寄贈・寄託者に対して該当資料の受領証・受託証を交付するものとする。

4　館長は、寄託を受けた資料等について十分な注意を持って保管しなければならない。

（細則の改廃）

第12条　本細則の改廃は、委員会および全学協議会の議を経るものとする。

（附則）

1 この細則に定めのない事項については、館長がその都度、委員会に諮り処理する。

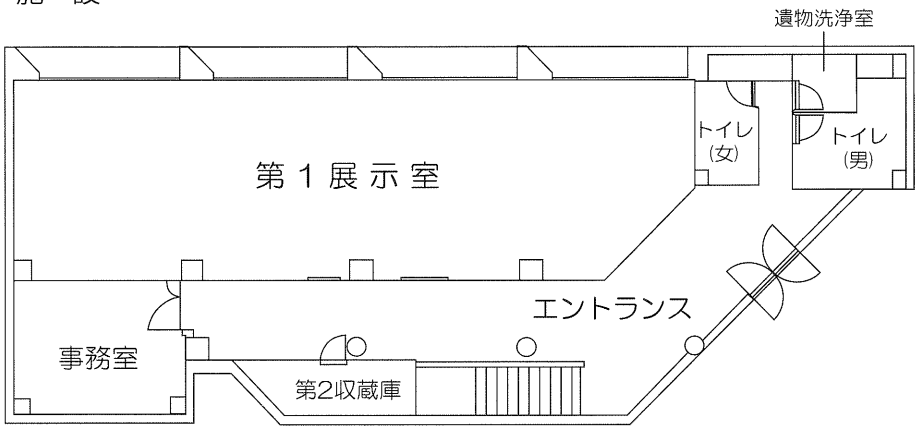
2 この細則は平成 14 年 4 月 1 日から施行する。

3 この細則は平成 15 年 4 月 1 日から施行する。

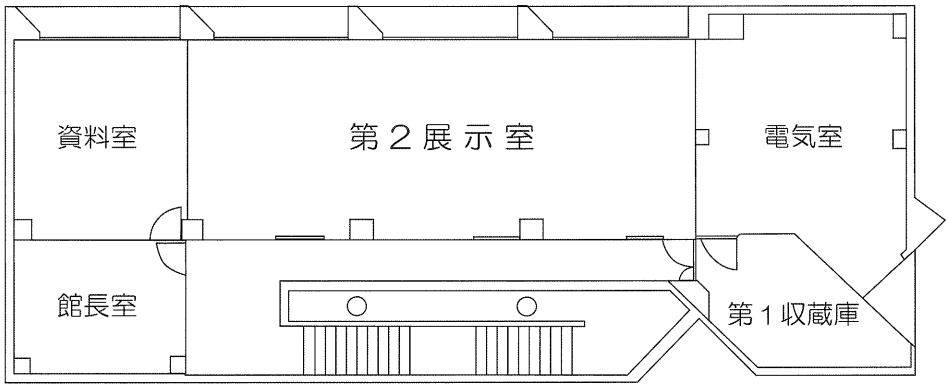
（申請書様式一覧）

様式 1 ：館内利用許可申請書
様式 2 ：館内利用許可書
様式 3 ：館外貸出許可申請書
様式 4 ：館外貸出許可書
様式 5 ：博物館資料寄贈申請書
様式 6 ：博物館資料寄託申請書
様式 7 ：博物館資料受領証
様式 8 ：博物館資料受託証
様式 9 ：博物館資料借用書

(5) 施　設



1階　平面図



2階　平面図

●建物
所 在 地・・・・埼玉県熊谷市万吉 1700
建築面積・・・・376.8 ㎡
構　　造・・・・鉄筋コンクリート造　２階建

●各室面積一覧
(１階)
第１展示室　・・・・93.88 ㎡
事　務　室　・・・・17.10 ㎡
第２収蔵庫　・・・・ 3.22 ㎡
ト　イ　レ　・・・・11.01 ㎡
遺物洗浄室　・・・・ 2.26 ㎡
エントランス・・・・45.64 ㎡

(２階)
第２展示室・・・・71.22 ㎡
館　長　室・・・・16.98 ㎡
資　料　室・・・・23.89 ㎡
第１収蔵庫・・・・12.30 ㎡
電　気　室・・・・39.00 ㎡

●各室仕様
(第１展示室・事務室)
床　・・・・タイルカーペット敷
壁　・・・・ビニールクロス貼り
天井・・・・ミネラートン

(第２展示室)
床　・・・・タイルカーペット敷
壁　・・・・ビニールクロス貼り
天井・・・・ミネラートン

(館長室・資料室)
床　・・・・タイルカーペット敷
壁　・・・・ビニールクロス貼り
天井・・・・ジプトーン

●電気設備
受電設備・・・・・6.6KV
変圧器設備・・・・電灯－ 100KVA 動力－ 80KVA
照明設備・・・・・展示室－ハロゲンランプ使用
館長室・事務室・資料室－蛍光灯使用

●防犯・防災設備
防犯設備・・・・各室熱センサー取付、非常通報設備
ITV 設備・・・・CCD カメラ４台、展示室等監視
自動火災報知設備・・・・P 型１級５回線
消化設備・・・・粉末消火器９台

●空調設備
空調機・・・・空冷式、パッケージエアコン (個別)

●給排水設備
給水設備・・・・市水道使用
給湯設備・・・・貯湯式電気湯沸器

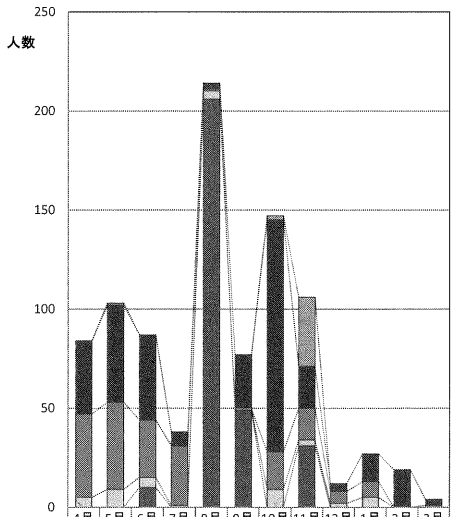
Ⅱ．事業報告

(1) 開館日数・入館者数

平成 26 年 4 月 1 日（火）～平成 27 年 3 月 28 日（土）までの 199 日間を開館した。総来館者数は 918 名であった。

内訳は一般 344 名、大学生 196 名、教職員 44 名、高校生以下 38 名、オープンキャンパス時の来館者 296 名である。

団体見学は、熊谷市中央公民館主催「初夏の文化財巡り」、立正大学父兄会、デイサービス遊楽、直実市民大学、桶川西高校、その他に社会福祉学部新入生、地球環境科学部、博物館学芸員科目受講生など、本校の授業の一環とした見学があった。



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
高校生以下	0	1	0	0	0	0	2	35	0	0	0	0
一般	37	49	43	7	3	27	117	21	4	14	19	3
本学学生	42	44	29	30	1	0	19	16	6	8	0	1
本学教職員	5	9	5	1	4	1	9	3	2	5	0	0
オープンキャンパス	0	0	10	0	206	49	0	31	0	0	0	0

表　平成 26 年度月別入館者数

(2) 出 版

本年度は、以下の出版物を刊行した。

- 立正大学博物館年報 12
- 第 9 回企画展パンフレット
  「立正大学のあゆみⅡ」
- 第 9 回特別展図録
  「近世の墓石と墓誌を探る」
- 館報　万吉だより 19 号・20 号
- 品川キャンパス展示リーフレット
  「立正大学が発掘した古代窯跡」

(3) 資料活用

当館所蔵の資料を以下の博物館等に貸出した。

貸出資料：八坂前窯跡関連写真 2 点
貸 出 先：国分寺市教育委員会（国分寺市）
利用目的:①『見学ガイド武蔵国分寺のはなし』に再掲載、②武蔵国分寺資料館特別展示「～国分寺市の今昔～」展示パネル及び図録に掲載

貸出資料：吉田格コレクション井草式土器　土器片 47 点
貸 出 先：杉並区郷土博物館（杉並区）
貸出期間：平成 27 年 7 月 5 日～ 10 月 31 日
利用目的：企画展示「古代の環境―遺跡が語る暮らしと自然」での展示及び図録に掲載

貸出資料：ネパール・ティラウラコット遺跡出土品 11 点
貸 出 先：立正大学政策広報課
貸出期間：平成 27 年 10 月 2 日～ 11 月 10 日
利用目的：中村元記念館（松江市）「立正大学のあゆみ展」での展示

(4) 展　示

1. 常設展示

－第１展示室（１F）－

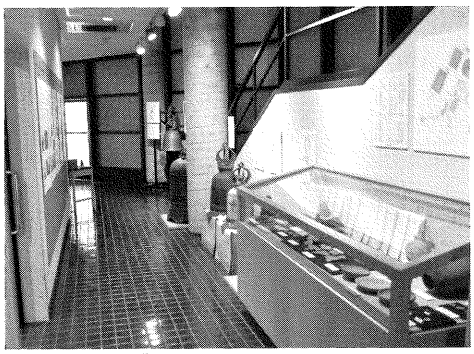
眞鍋孝志氏（日本古鐘研究会会長）より寄贈されたアジア諸地域の梵音具を中心とする撫石庵コレクション、および立正大学考古学研究室が 1958 年～ 1980 年にかけて文部省（現文部科学省）の科学研究費の交付などを受けて実施した「古代窯業の考古学的研究」によって発掘された資料を中心に展示している。

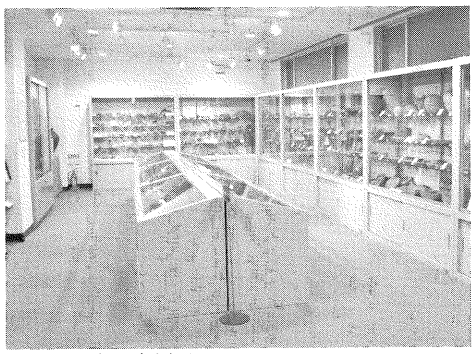
この他に、旧石器時代の資料として北海道白滝遺跡・報徳遺跡、神奈川県朝日遺跡の出土品、縄文時代では埼玉県石神貝塚、古墳時代では埼玉県野原古墳群の出土資料を展示している。

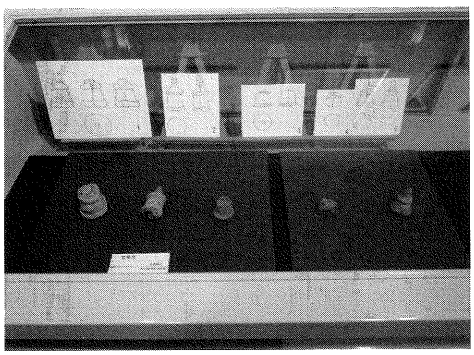
また、熊谷キャンパスにおける施設の建築に際して、事前に文化財保護法によって定められた遺跡の発掘調査を実施しており、その折に、発掘された資料を展示している。

古代から近世にかけては、千葉県九十九坊廃寺・長熊廃寺跡出土品、神奈川県下出土火葬骨蔵器などを展示している。また、平成 25 年度に特別展展示した泥塔と瓦経の一部を新たに追加展示している。

撫石庵コレクションは、日本をはじめ、朝鮮半島・中国・タイ・ミャンマー・スリランカなどアジア各地の梵音具（鐘・鐸）のほか、金銅釈迦如来立像などが展示されている。特に、伝橿原市出土の梵鐘は、わが国の初現期の梵鐘として、極めて貴重な資料である。あわせて、この伝橿原市出土鐘を復元した鐘が寄贈されており、古代の音色を聞くことができる。


エントランス展示


第１展示室・東側展示


第１展示室・泥塔展示

第１展示室・新久窯跡展示

－第２展示室（２F）－

吉田格コレクション、樺太出土資料、ネパール・ティラウラコット出土資料、板碑を展示している。

吉田格コレクションは、吉田格氏（立正大学専門部地歴科卒）寄贈のコレクションである。吉田氏は縄文文化研究者として著名であり、とくに縄文時代早期の花輪台式土器、後期の称名寺式土器は吉田氏によって設定された型式標準資料として学界に周知されている。称名寺貝塚出土の土器・石器・骨角器および骨角器原料（鹿角）は縄文文化の研究上、極めて重要な資料である。

また、本草学者・伊藤圭介（日本最初の理学博士）蒐集の石器は、『日本産物誌』明治９（1876）年に収録されているものと、嘉永５（1852）年の箱書きを持つものがあり、当時の石器の貴重な資料として吉田コレクションに収められている。

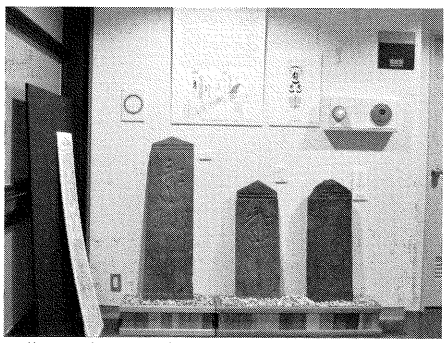
樺太出土資料は、久保常晴博士（元本学名誉教授）寄贈のコレクションで、博士が1930年代に樺太の地を踏査された際に収集されたものである。

ネパール・ティラウラコット出土資料は、1967年～1977年にかけて、立正大学がネパール王国に派遣した発掘調査団によって発掘された資料で、日本とネパール両国の親善のために、ネパール考古局より寄贈された資料である。

ティラウラコット遺跡は、釈尊出家の故城－カピラ城跡の有力な比定遺跡として世界の学界に知られていた。その地を10年間にわたって発掘調査した結果、カピラ城跡の最有力遺跡として注目されるにいたっている。東西約400m、南北約480mの方形の城跡内に７つの遺丘が存在し、そのうちの２箇所を発掘して得られた資料である。

第２展示室・ネパール・ティラウラコット資料

第２展示室・吉田コレクション


２階展示室入口・板碑展示

第２展示室・吉田コレクション

2．企画展示

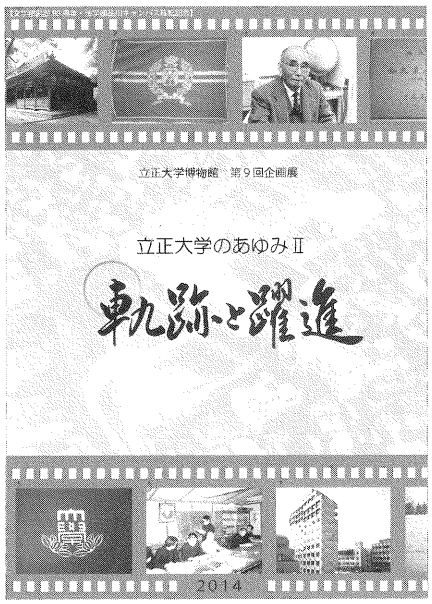
第９回企画展「立正大学のあゆみⅡ」

◆期間：【品川キャンパス】平成 26 年６月 24 日（火）～９月 25 日（木）、【立正大学博物館】平成 26 年 11 月５日（水）～ 12 月５日（金）

◆内容：立正大学は、その淵源を飯高檀林に求めることができる。飯高檀林は、天正８（1580）年に日蓮宗僧侶の学問所として下総国飯高郷（現在の千葉県匝瑳市飯高）に創設され、295 年間もの長い間、多くの学僧を世に送り出してきた。

その後、日蓮宗では、明治５（1872）年８月に従来の檀林廃止の通達を出し、東京の芝、二本榎の承教寺内に日蓮宗小教院を設置し、諸宗に先駆け一宗独立の教育機関を創設した。

明治 37（1904）年には、現在の品川区大崎の地に土地を購入し、日蓮宗大学林として新たな出発を果たした。



第９回企画展パンフレット

そして大正 13（1924）年５月 17 日、大学令による「立正大学」の設立認可がおり、日蓮宗僧侶の教育機関から、一般学生も受け入れる大学となった。

平成 26 年度より大崎キャンパスは、将来の飛躍を期待して“品川キャンパス”と名称が変更された。この平成 26（2014）年は、大正 13（1924）年に開設された立正大学文学部が 90 周年を迎えた年でもある。

また、昭和 56（1981）年に熊谷キャンパスに開設された法学部は、品川キャンパスへの移転が開始された。

立正大学博物館においても、平成 26 年４月に品川キャンパス９号館エントランスに展示スペースを確保し、新たな博物館活動がスタートした。

これらを記念して、品川・熊谷両キャンパスの学生や多くの方々に立正大学のあゆみを知っていただくため、本展示を企画した。

当館では過去にも「立正大学のあゆみ」（平成 19 年度第４回企画展）を開催し、立正大学の歴史を紹介してきた。この度の展示では、第４回企画展の内容に加え、文学部と法学部にスポットをあて、各学科の紹介や、昭和 30 ～ 40 年代頃の授業風景写真の展示を行った。

企画展展示の様子

3．特別展示

第９回特別展「近世の墓石と墓誌を探る」

◆期間：【立正大学博物館】平成 27 年 1 月 28 日（水）～2 月 27 日（金）

◆内容：平成 26 年度の特別展として、近世の墓石と墓誌をとりあげた。

立正大学博物館に所蔵されている資料は、文学部考古学研究室が長年収集してきた資料が主体を占めている。この資料の中には、古代から近世に至る多くの墳墓関連資料が含まれており、平成 21 年には第 6 回特別展「題目板碑の世界」、平成 22 年には第 7 回企画展「古代・中世の武蔵国の骨蔵器」を展示した。今回はこの一連の企画として「近世の墓石と墓誌を探る」と題して行った。

この度の展示では、近世の支配者階層である武家の墓石ではなく、農民・町人身分の墓石を扱っている。近世墓石は、地域社会の確立にともなって 17 世紀後半代に造立が定着しており、現在でもその多くが寺院境内墓地などに残されている。

第 1 部では、関東地方において近世初期に造立された墓石である、廟墓・屋弛型墓標・尖頂舟形墓標を紹介した。関連資料として、廟墓内に納められていた、銚子砂岩製一石宝篋印塔 1 基、銚子砂岩製一石五輪塔 2 基、その他に静岡県浜松市採集の一石五輪塔 1 基、大田区池上本門寺境内墓地所在の初期（元和年間）尖頂舟形墓標の拓本 2 点などを展示した。

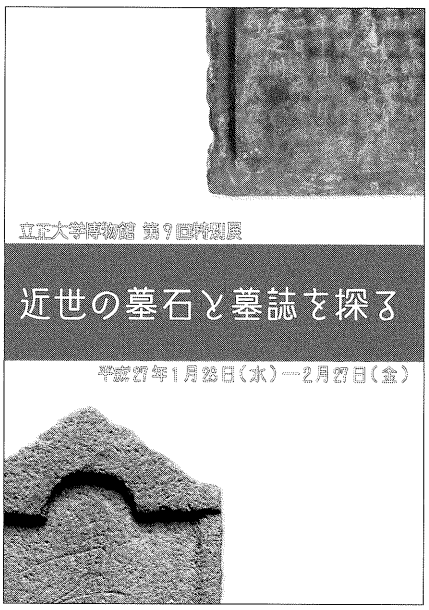
第 2 部では、立正大学博物館の所在地である熊谷市内の近世墓石の様相をまとめた。当館では、平成 21 年度より博物館学芸員課程の館務実習の一環として、近世墓石を対象とした資料収集実習を行ってきた。その資料集成の成果として、江戸時代における墓石造立の変遷や、墓石から伺える階層性、熊谷市域の石工について紹介した。

第 3 部では、当館所蔵の越智松平家斉厚（上野館林藩 3 代・石見浜田藩初代）夫人の石製墓誌 1 組と、荒川区の善性寺（日蓮宗）所在の越智松平家一族の墓誌（このうち拓本 3 点を展示）を集成し、近世における墓誌の様相をまとめた。

また、平成 27 年 3 月末より、品川キャンパス 9 号館エントランスにて移動展示を行っている。

【関連事業】

平成 27 年 2 月 7 日（土）に「近世と墓石と墓誌を探る」と題し、池上悟館長による講演会を品川キャンパスにて行った。



第９回特別展チラシ

４．品川キャンパス展示

平成 26 年４月より、品川キャンパス９号館エントランスに展示スペースを設置した。展示パネルでの博物館収蔵資料の紹介や、企画展・特別展の移動展示を行った。

第１回「立正大学博物館への招待」
◆期間：４月～５月
◆内容：展示スペースの開設を記念し、立正大学博物館の展示や活動について紹介するため、写真を中心としたパネル展を行った。

第２回「立正大学のあゆみⅡ」（立正大学博物館第９回企画展移動展示）
◆期間：６月～８月
◆内容：立正大学文学部が 90 周年及び、法学部の品川キャンパス移転を記念し開催した、企画展の移動展である。立正大学の歴史を踏まえ、両学部の歴史にスポットをあて、各学科の紹介や、昭和 30 ～ 40 年代頃の授業風景写真の展示を行った。

第３回「立正大学が発掘した古代窯跡」
◆期間：９月～翌年２月
◆内容：立正大学考古学研究室は、昭和 30 年代から昭和 50 年代にかけて、初代の博物館長をつとめられた坂詰秀一名誉教授による「古代窯業の考古学的研究」に関連して、全国的な発掘調査を実施した。この調査によって、古代における窯業の実態を明らかにする大きな役割を果たすことができた。

この「古代窯業の考古学的研究」の成果を紹介し、実物の資料とともに展示を行った。

第４回「近世の墓石と墓誌を探る」（立正大学博物館第９回特別展移動展示）
◆期間：３月～５月（予定）
◆内容：第９回特別展移動展示として、内容を一部縮小し、解説パネルと一石宝篋印塔などの実物資料や拓本などを展示した。

第３回「立正大学が発掘した古代窯跡」

第４回「近世の墓石と墓誌を探る」（移動展）

（5）教育 普及

1. 博物館館務実習

平成26年度の博物館学芸員課程の館務実習を以下の日程で延９日間行った。実習生は14名で、その内訳は、文学部史学科 10 名、文学部哲学科２名、仏教学部仏教学科２名であった。

［資料収集実習事前講義］

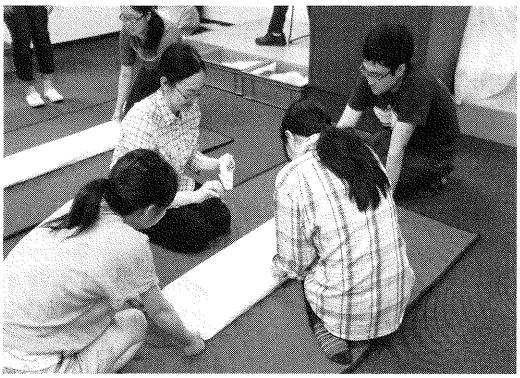
◆７月 16 日（水）６限　品川キャンパス

池上悟館長が、資料収集対象である近世の墓石について講義を行った。また、資料収集実習の調査方法についても学んだ。

［資料収集実習］

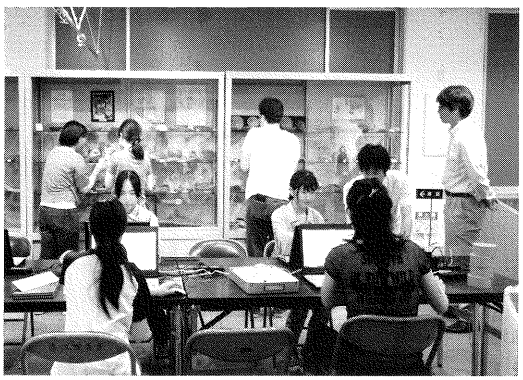
◆７月 20 日（日）・21 日（月）

池上本門寺の境内墓地において、近世墓石の調査を行った。調査カードに墓標の型式・大きさ・石材・銘文などの情報を記録し、写真撮影を行った。



梱包材製作の実習

刀剣取扱の実習



展示キャプション製作の実習

館務実習生集合写真

［館務実習］博物館及び、熊谷キャンパス内

◆８月７日（木）

担当：池上悟館長（午前）

　　池田奈緒子学芸員（午後）

午前は、資料収集実習のまとめとして、池上悟館長による文化史の講義を行った。

午後は、資料収集実習で作成した調査カードを整理し、収蔵資料台帳作りを行った。

◆８月８日（金）

担当：井上尚明先生（元埼玉県立博物館館長）

資料の取り扱いと梱包について学んだ。実際に梱包材を作り、収蔵資料を梱包し、開梱する一連の作業を行った。

◆８月９日（土）

担当：田隠和久先生（文学部社会学科准教授）

日本刀について学び、模造刀を使用し、刀剣の取り扱いと手入れの実習を行った。

◆８月 11 日（月）

担当:紺野英二先生（文学部史学科非常勤講師）

博物館展示の展示方法について講義を受けた後、博物館内のパネル作成と展示作業を行った。

◆８月 12 日（火）

担当：石山秀和先生（文学部史学科准教授）

古文書の取り扱い方や、調査方法を学び、実際に古文書と和本の調査カードを作成した。

◆８月 13 日（水）

担当：川野良信先生（地球環境科学部教授）

岩石学の基礎知識を学び、事前に荒川河川敷にて採集した岩石などを使用し、岩石標本を作製した。

2. 土器焼成

土器焼きは例年、文学部史学科の「考古学実習６」（４年生対象）の一環で行われている。

今年度も、平成 26 年 11 月１日（土）・２日（日）の２日間、博物館が協力し、熊谷キャンパス敷地内において行われた。参加者は、考古学専攻生９名、大学院生２名で、講師の竹花宏之先生の指導の下、野焼きで土器を焼成した。

土器焼成の様子

(6) 調査・研究

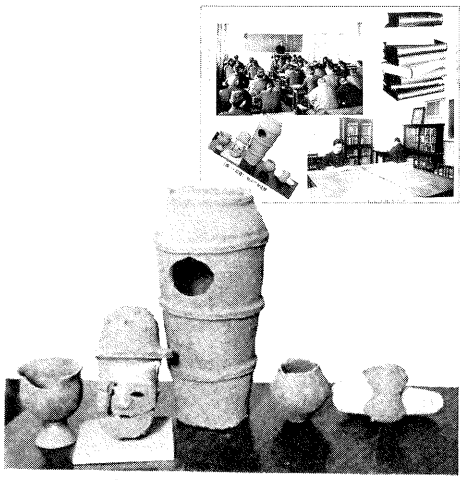
立正大学博物館所蔵の埴輪について (1)

はじめに

立正大学博物館には4点の埴輪が所蔵されています。円筒埴輪2点、朝顔形埴輪、人物埴輪各1点です。今回は、これら4点の埴輪のうち朝顔形埴輪を紹介します。

この朝顔形埴輪は、昭和28(1953)年立正大学発行の絵はがきにその写真が掲載され(第1図)、当時歴史参考品室に所蔵されていたことが知られています。しかしながら、その所蔵の経緯についての詳細は記録がなく、寄贈者や出土地は詳らかでありません。埴輪の外面に記された註記も「不明」とあるのみです。

元立正大学博物館館長であり、立正大学における考古学研究の礎を築かれた坂誥秀一先生によれば、「この埴輪と一緒に寄贈された円筒埴輪は、森本六爾が昭和元年に発掘調査した東京都大田区久ケ原の埴輪工房生産址[1]の近くから出土したとの伝承がある。久保常晴先生の寄贈資料に当時の日誌[2]があり、そこに記載があるかもしれない。」とのことです。



第1図　絵はがきに掲載された埴輪

埴輪の観察

本資料は円筒形の埴輪ですが、残存する一番上の突帯部に向かってすぼまっていることから、朝顔形埴輪と思われます。口縁部以外はほぼ完形で、体部は3条4段の構成です。

埴輪の大きさは、高さ43.8 cm以上、底径14.0～14.8 cm、最大径21.4 cmです。厚さは11.0～14.0㎜程度と全体に薄い造りになっています。器形は上にいくにしたがってやや広がり、3条目の突帯部分で直径が最大となります。その上は4条目の突帯に向かってすぼまり、4条目の突帯での直径は16 cmです。突帯の上辺での間隔は4段目を除き約12cmとほぼ等間隔です。　外面は、一次調整のタテハケ後に突帯を貼付け、突帯とその上下をなでつけていますが、肩部のみは突帯貼付け後にもタテハケを施しています。タテハケによって表面の粘土の下部がハケメ単位で弧を描き、フリルのようにみえます。

内面は、斜め方向のハケ調整の後、タテハケによる調整をしていますが、ハケメは密ではなく、ハケメの間にナデの痕もみられ、特に下方はあまりハケメがありません。粘土紐を積上げた痕は上から下にナデながら消していますが、残っている部分もあります。胴部と肩部の接合部分は指で押さえた跡が明瞭で、肩部はナデと指押さえによる調整で、ハケメはみられません。4段目突帯部分は斜め方向のハケメの後にヨコナデによる調整を施しています。肩部と口

縁の接合部(4段目突帯の下部)は、接合痕が明瞭に残っています。

突帯の断面はM字状の台形で、しっかりしています。2条目と3条目の突帯間に円形の透孔が2孔対であけられ、透孔は横方向の直径約8.8 cm、縦方向の直径7.6 cmで、1孔の透孔の右側に線刻がみられます。線刻は「U」字状の線に2本の横線が重なっています。

底部には、粘土板の接合痕が一カ所みられます。接合痕に対面する部分の底部が欠損し、接合痕は確認できませんが、おそらく2枚の粘土板を接合し、基部としたもの思われます。底部調整はなく底部には棒状の圧痕がみられます。

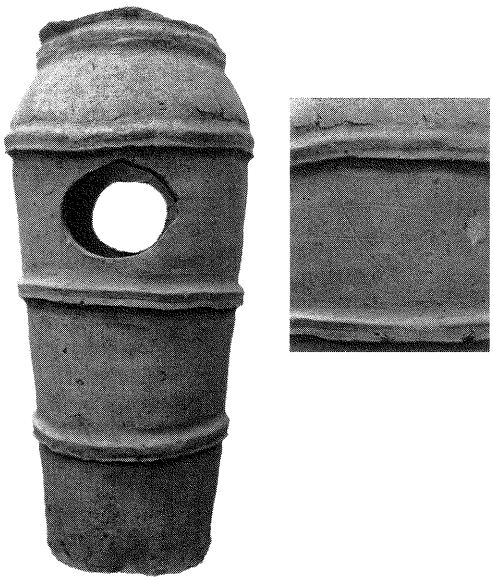
焼成は大変良く、焼き上がりは堅緻で、色調は全体にややくすんだ明褐色です。黒斑はみられず窖窯による焼成と思われます。胎土は密ですが経3～10㎜ほどの小石が混入しています。

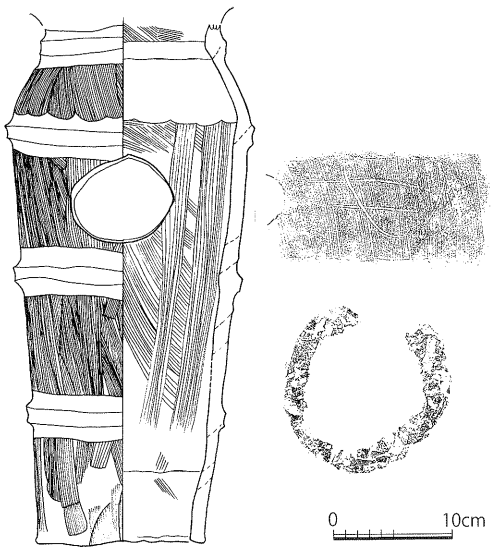
まとめ

ここに紹介した朝顔形埴輪は、窖窯焼成であること、胴部の外面がタテハケの一次調整のみであることなどから、川西宏幸氏による円筒埴輪編年Ⅴ期[3]にあたり、5世紀後葉以降に製作されたものと考えられます。ただし、器肉が薄く、しっかりとした造りであること、突帯がほぼ等間隔であること、肩部には二次調整が施されていること、外面に線刻がみられることなどから、6世紀前半代におさまるものと思われます。

埴輪についての伝承からは、久ケ原周辺あるいは東京西部地域の古墳から出土した可能性が高いものと考えられます。周辺地域の埴輪と比較検討すると、日吉矢上古墳の朝顔形埴輪の特徴と共通する点がみられます[4]。

日吉矢上古墳は、多摩川右岸、横浜市港北区





第2図　朝顔形埴輪実測図(S=1/5)

にあった直径 25m の円墳で、昭和 11(1936) 年に慶應大学校地整備によって発見され、柴田常恵らによって発掘調査されています[5]。埋葬施設の粘土床には鼉龍鏡（だりゅうきょう）、各種玉類、鉄剣、竹櫛などが副葬され、墳丘からは円筒埴輪が出土しています。古墳は残っていませんが、多摩川流域の中期古墳として貴重な資料です。

その後、横浜市歴史博物館に寄贈された朝顔形埴輪が註 (4) に掲載されている資料です[6]。今後、日吉矢上古墳の埴輪の調査により、本資料との比較検討を報告する予定です。

資料紹介にあたり、坂詰秀一先生、池上悟先生、寺田良喜氏、山田俊輔氏にご教示いただきました。記して感謝いたします。

【註・引用文献】

(1) 東京都大田区の下沼部埴輪製造址と思われます。
森本六爾「埴輪製作所址及窯跡」『考古学』第 1 巻第 4 号 昭和 5(1930) 年

(2) 現在資料調査中です。

(3) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号 昭和 53(1978) 年

(4) 横浜市歴史博物館『横浜市歴史博物館企画展　古墳時代の生活革命－ 5 世紀後半　矢崎山遺跡－』平成 22(2010) 年 30 頁掲載資料

(5) 保坂三郎・柴田常恵『日吉矢上古墳』昭和 18(1933) 年

(6) 横浜市歴史博物館の柳沼千枝氏にご教示頂きました。

【参考文献】

第 52 回埋蔵文化財研究集会実行委員会『第 52 回　埋蔵文化財研究集会　埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』平成 15(2003) 年

立正大学博物館研究員
（立正大学大学院博士課程）足立佳代

※万吉だより第 19 号より再録。一部修正を加えた。

立正大学博物館所蔵の埴輪について (2)

今回紹介する資料は、立正大学博物館に所蔵されている円筒埴輪 2 点のうちの 1 点です。

元立正大学博物館館長である坂詰秀一先生の著書に写真が掲載されています。その解説によれば、森本六爾が昭和元（1926）年に発掘調査した東京都大田区の下沼部埴輪生産址[1]から出土したものとされ[2]、埴輪の外面には「池上町久ケ原」と注記されています。

埴輪の観察

本資料は円筒埴輪の上部で、下部は欠損していますが、2 条 3 段の円筒埴輪と思われます。現状で高さは、32 cm、口径 23 ～ 23.5 cm、厚さは 10 ～ 12 ㎜程度と全体に薄い造りになっています。各段の高さは、最上段、3 段目が約 15.5 cm、2 段目が約 13 cm で、3 段目が長いのが特徴的です。2 段目には円形の透孔が 2 孔対であけられています。透孔は横方向の直径約 7 cm、縦方向の直径 6 cm です。突帯の断面は台形を呈しています。口唇部は、端部が受け口状につまみ上げられています。

外面の調整は、タテハケによる一次調整ですが、口縁上部にタテハケの後、斜め方向のハケ調整を施している点が特徴的です。口縁端部は工具状のもので強くナデられています。突帯を貼付けその上下をナデつけていますが、突帯の粘土の貼付け方があまく、位置によっては突帯が面から浮いています。また、突帯の調整は、工具状のもので強くナデつけられ、条線が残っています。

内面は、粘土帯を輪積みした痕が明瞭に残り、上に積んだ粘土を指で上から押しつけなが

ら接合したようすが見られます。さらに縦方向とやや斜め方向のハケ調整が施され、口縁はナデによってハケメが消されています。ただし全体の４分の１ほどにはハケメが見られません。

口縁部内面に「川」の字状に３本の線刻がありますが、中央とその右側の線は明瞭で、左側の線は表面を軽く引掻いたようで、はっきりとした線ではありません。

焼成は良好であり、焼き上がりは堅緻、色調は明褐色です。胎土はやや密ですが、直径３～10㎜ほどの小石が混入しています。

まとめ

本資料は、２条３段の円筒埴輪で、タテハケ、円形透孔、３段目が長い形態をもつという特徴があります。こうした特徴は、城倉正祥氏が設定する、北武蔵における埴輪生産の定着期にあたるⅢａ群に類似しています。北武蔵地域は、埴輪生産において、情報を発信する立場にあるとされ、６世紀初頭から前半に南武蔵や東北地方にも類似した埴輪が知られています[3]。本資料も、北武蔵の影響下にあった可能性があります。

下沼部埴輪製作址については、報告に掲載された埴輪の所在は不明で、本資料が唯一といえるものです。『万吉だより』第19号に報告した朝顔形埴輪とともに今後も調査を続け、報告する予定です。

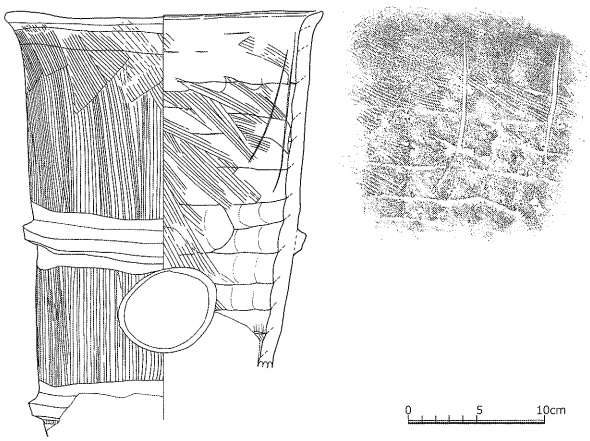
資料紹介にあたり、坂詰秀一先生、池上悟先生、日高慎氏にご教示いただきました。記して感謝いたします。

【註・参考文献】

(1) 森本六爾「埴輪製作所址及窯跡」『考古学』第１巻第４号 昭和5(1930)年
(2) 坂詰秀一『日本の古代遺跡32：東京23区』保育社　昭和62(1987)年
(3) 城倉正祥『埴輪生産と地域社会』学生社　平成21(2009)年

立正大学博物館研究員
（立正大学大学院博士課程）足立佳代

※万吉だより第20号より再録。一部修正を加えた。



第１図　「池上町久ヶ原」円筒埴輪

Ⅲ. 受贈図書目録（2014年4月～2015年3月）

〈青森県〉

青森市教育委員会

・いにしえ青森　Vol.22・Vol.23

青森市埋蔵文化財調査報告書

・第117集　市内遺跡発掘調査報告書22

・第118集　市内遺跡発掘調査報告書23

八戸市埋蔵文化財センター　是川縄文館

・研究紀要　第3号

・掘りdayはちのへ　第17号

・トーテムポールの人びと～漁労・狩猟採集民のくらし～

・海と火山と縄文人

・年報　No.3　平成25年度

八戸市教育委員会

八戸市埋蔵文化財調査報告書

・第143集　八戸市内遺跡発掘調査報告書31

・第144集　一王寺（1）遺跡

・第145集　狼走（2）遺跡・北熊ノ沢（2）遺跡

・第146集　館平遺跡第27地点・咽平遺跡第3地点

・第147集　新井田古館遺跡第28地点

・第148集　新井田古館遺跡第29地点

つがる市教育委員会

・つがる市の環境変遷と縄文遺跡

〈宮城県〉

東北学院大学博物館

・年報　Vol. 4

・人体図解・明堂図・銅人形と読本『昔話稲妻表紙』

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

・年報5　2013年度

東北学院大学

・ひとり一人のくらしの風景が見えてくる―東北学院大学「牡鹿半島のくらし展」―

〈福島県〉

福島県文化財センター白河館

・まほろん通信　Vol.51～54

〈新潟県〉

長岡市立科学博物館

・長岡市立科学博物館報（NKH）　第98号

〈富山県〉

富山市教育委員会

・富山市の遺跡物語　第15号

富山市埋蔵文化財調査報告

・61　富山市内遺跡発掘調査概要XI

・62　富山市内遺跡発掘調査概要XII

・63　富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書

・68　富山市内遺跡発掘調査概要XIII

・69　富山市内石造物等調査報告書Ⅲ

〈茨城県〉

取手市埋蔵文化財センター

・大地を切り拓いた人びと

・よみがえる文化財と郷土の歩み

〈群馬県〉

高崎市観音塚考古資料館

・かがみ―人々の心を支えた鏡たち―

安中市学習の森ふるさと学習館

・碓氷社―安中市の蚕糸業の過去と現在―

〈栃木県〉

栃木県立なす風土記の丘資料館

・那須人のあしあと―遺跡と人の物語―

・年報　第22号

栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

・しもつけの埴輪群像―そのすがたをさぐる

・年報　第 28 号

〈埼玉県〉

熊谷市立熊谷図書館　美術、郷土係

・小島恭三展

・熊谷染関連資料調査報告書Ⅰ―岸家型紙―

・西別府遺跡群と幡羅遺跡展

・昔のくらし展Ⅱ～衣・食・住～

埼玉熊谷市不二之腰遺跡調査会

・不二之腰遺跡Ⅱ

・南方遺跡Ⅱ

・上之古墳群・諏訪木遺跡

埼玉県熊谷市前中西遺跡調査会

・前中西遺跡ⅠⅩ

蕨市立歴史民俗資料館

・紀要　第 11 号

・アトリエ Warabi　Vol.1―織・木彫・GLASS―

さいたま市立浦和博物館

・館報　あかんさす　第 107 号

久喜市立郷土資料館

・懐かしいふるさとの風景―久喜を写した古写真展―

・神楽の世界と久喜の歴史・文化

・発掘！縄文時代のむら―地獄田遺跡展―

羽生市教育委員会

羽生市発掘調査報告書

・第 4 集　小松古墳群 1 号墳

川越市立博物館

・絵図で見る川越―空から眺める江戸時代の川越―

・博物館だより　第 71 号・第 72 号

・上寺山帯津家文書目録

・没後 300 年記念　柳澤吉保とその時代―柳沢文庫伝来の品々を中心に―

宮代町郷土資料館

・宮代町文化財調査報告書　第 21 集・第 22 集

・道仏北遺跡発掘出土品展Ⅲ

・英文学者　島村盛助Ⅱ

春日部市教育委員会

春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書

・第 15 集　八木崎遺跡 5 次地点

・第 16 集　貝の内遺跡 17.27 次地点　浜川戸遺跡 31.32.33 次地点

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書

・第 136 集　下郷遺跡 VIII

・第 137 集　白山遺跡 V

・第 138 集　上敷免北遺跡（第 6 次）

・第 139 集　深谷市内遺跡 XX

・第 140 集　熊野遺跡 XIV(第 153 次)

・第 141 集　小前田古墳群（第 2 次）

朝霞市博物館

・研究紀要　第 14 号

・朝霞市博物館活用授業実践事例集　Ⅶ

・岩石・鉱物と大昔のくらし

・東洋一を目指して―朝霞が育てた日本人のゴルフ―

埼玉県立自然の博物館

・ニュースレター　瀞　第 22 号

毛呂山町歴史民俗資料館

毛呂山町埋蔵文化財調査報告書

・第 29 集　川角古墳群・崇徳寺跡―第 1 次発掘調査報告書―

行田市郷土博物館

・常設展示解説図録

・館報　第 17 号

・忍藩士の文化

・麦の文化誌

久喜市教育委員会

・久喜市栗橋町史　第二巻　通史編下

神川町教育委員会

神川町埋蔵文化財調査報告書

・第７集　青柳古墳群南塚原支群Ⅳ・出土遺物等整理報告

白岡市教育委員会

白岡市埋蔵文化財調査報告書

・第23集　前田遺跡（第２地点）

嵐山史跡の博物館

・館報　第33号

吉見町埋蔵文化財センター

・町内遺跡８　吉見町埋蔵文化財調査報告書

日高市教育委員会

日高市埋蔵文化財調査報告

・第34集　北ノ原―1次調査―　西佛―2・3次調査―　森ノ越―2次調査―

・第35集　高麗石器時代住居跡遺跡

埼玉県立川の博物館

・かわはく　No.42～44、No.48～50

・紀要　14号

・荒川流域の鉱山と産業～地下資源の利用と人々のくらし～

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

・埋文さいたま　No.57

蓮田市文化財展示館

・「災害と蓮田」―太古から様々な災害と向き合った人々―

蓮田市教育委員会

・国指定史跡黒浜貝塚―整備基本構想・基本計画策定報告書―

埼玉県蓮田市文化財調査報告書

・第51集　宿浦遺跡―第20調査地点―　宿浦遺跡―第22調査地点―　荒川附遺跡―第25調査地点―　天神前遺跡―第31調査地点―

・第52集　国指定史跡黒浜貝塚　地質調査・物理探査・化学分析総合調査報告書

・第53集　宿浦遺跡　黒浜土地区画整理事業に伴う発掘調査３

桶川市教育委員会

・平成25年度桶川市内遺跡範囲確認調査報告書

日本工業大学　工業技術博物館

・工業技術博物館ニュース　第88号～第90号

・工業技術博物館収蔵展示品ガイド

さいたま文学館

・俳毒庵―子規門の奇才―中野三允

・利根川と文学～生活・風土・人物・災害をめぐる作品～

・森田恒友と文芸雑誌―「電気と文芸」を中心に―

入間市博物館

・NUWSALIT　No.68～70

・狭山茶の歴史と現在"故きを温寝て新しきを知る"

・西久保観世音の鉦はり　埼玉県入間市宮寺の双盤念仏　普及用ＤＶＤ

・アリットフェスタ2014特別展　大地にねむる入間の遺跡―足もとの歴史・再発見！―

埼玉県立歴史と民俗の博物館

・要覧　第９号

・THE A MUSEUM　第25号～第27号

・にっぽん歴史街道　江戸の街道　～絵図でたどる宿場と関所～

・甦る鉄剣

・埼玉稲荷山古墳出土　国宝金錯銘鉄剣復元制作報告書

・屋根裏部屋の博物館

・屋根裏部屋の博物館　渋沢敬三と埼玉

埼玉考古学会

・第47回　遺跡発掘調査報告会発表要旨

春日部市郷土博物館

・江戸川！「新利根川」を造った男と分断された庄内領

戸田市立郷土博物館

・郷土博物館だより　第 42 号

・彩湖・道満の生きものたちの声

・将軍家の鷹場―戸田筋―

・要覧　平成 25 年度・平成 26 年度

・研究紀要　第 23 号・第 24 号

美里町教育委員会

美里町遺跡発掘調査報告書

・第 23 集　南志度川 B 遺跡・熊谷後遺跡

川口市立科学館

・年報　平成 25 年度

寄居町教育委員会

寄居町文化財調査報告

・第 33 集　町内遺跡 16　薬師台遺跡（第 2・3 次）

・第 37 集　前塚田遺跡

サトエ記念美術博物館

・大津鎮雄展～西欧の誘惑・少年時代から辿る画家の生涯～

埼玉県立さきたま史跡の博物館

・ハニワの世界

・館報　No. 9

加須市教育委員会

加須市埋蔵文化財調査報告書

・第 7 集　騎西城武家屋敷跡 第 2・3・8・9・50・51 次調査　騎西城跡 第 3・12・14・15 次調査　多賀谷氏館跡 第 1 ～ 3 次調査

さいたま市立博物館

・健康長寿への心得 江戸時代の養生と介護

・年報　平成 25 年度

・人々の装い―明治から昭和初期のさいたま―

飯能市郷土館

・機屋の挑戦―明治から昭和へ、小槻工場物語―

ふじみ野市立大井郷土資料館

・地形とくらしのつながり

鉄道博物館

・鐵博　第 3 号

・東京駅開業 100 周年記念　100 年のプロローグ

鶴ヶ島市遺跡発掘調査会

・発掘調査報告書　第 74 集　元屋敷遺跡 B

・博物館だより　第 73 号

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

・館報　第 17 号

飯能市郷土館

・護符・版木など　飯能市郷土館収蔵資料目録 6（民族資料目録 2）

・飯能市郷土館館報郷土館のプロフィール Profile2012　活動報告書第 10 号

埼玉ピースミュージアム（埼玉県平和資料館）

・埼玉ピースレター　通巻 52 号

上福岡歴史民俗資料

・資料館通信　第 67 号

富士見市立難波田城資料館

・古老が描いた昔―喜太郎さんのスケッチブック―

〈千葉県〉

市立市川考古博物館

・館報　第 39 号～第 41 号

千葉県立関宿城博物館

・研究報告　第 18 号

・通運丸で結ばれた関宿・野田・流山―海運へのターニングポイント―

大原幽学記念館

・ふるさと歴史マンガ　大原幽学

・国指定史跡大原幽学遺跡

・大原幽学記念館報告　第 2 号

千葉県立中央博物館

・中央博物館だより　No.71

・しいむじな　第 42 号～第 44 号

・海藻いろいろ―千葉県の豊かな海から―

・水辺の記憶―写真家林辰雄のまなざし―

〈東京都〉

公益財団法人　日本博物館協会

・博物館協会　第 8 号
・博物館研究　第 49 巻　第 4 号～第 12 号、第 50 巻　第 1 号～第 3 号
・大津波被災文化財保存修復技術連携プロジェクト　安定化処理
・会員名簿　平成 26 年度

明治大学博物館

・研究報告　第 19 号
・明治大学博物館 10 年のあゆみ
・年報　2013 年度
・藩領と江戸藩邸―内藤家文書の描く磐城平、延岡、江戸―

明治大学校地内遺跡調査団

・明治大学校地内調査団 9（2012・13 年度）

公益財団法人　日本文化財保護協会

・飛天　平成 26 年会報

東京家政学院生活文化博物館

・年報　第 22 号

公益財団法人　渋沢栄一記念財団　渋沢史料館

・青淵　第 782 号～第 792 号
・実業家たちのおもてなし　渋沢栄一と帝国ホテル
・商人の輿論をつくる！～渋沢栄一と東京商法会議所～
・渋沢研究　第 27 号

お札と切手の博物館

・お札と切手の博物館ニュース　第 34 号・第 35 号

一般財団法人　全国科学博物館振興財団

・milsil　通巻 39 ～ 44 号

台東区立中央図書館　郷土・資料調査室

・郷土・資料調査室報　第 5 号

文化環境研究所

・Cultivate　No.42・43
・文環研レポート　No.33・34

大田区立郷土博物館

・紀要　第 20 号
・馬込文士村―あの頃、馬込は笑いに充ちていた―

立正大学古文書研究会

・埼玉県における地租改正事業―埼玉県第八大区三小区下奈良村の事例を中心に―平成 25 年度調査報告書

立正大学経営学会

・立正経営論集　第 46 巻　第 2 号

立正大学考古学研究会

・立正考古　第 51 号

早稲田システム開発株式会社

・MAPPSpress 頑張れ、ミュージアム　No.7
・MUSEUM INTERVIEW　100 ～ 106
・ミュージアム関連報道記事スクラップ集 Vol.54 ～ Vol.57
・MAPPS セミナー 021

國學院大學学術資料センター

・國學院大學学術資料センター研究報告書 第 30 輯

國學院大學博物館

・富士山―その景観と信仰・芸術―

公益財団法人　日本ユネスコ協会連盟

・世界遺産年報 2015　No.20

学習院大学　学芸員課程事務室

・学芸員 Bulletin for Curator's Course　No.18

大東文化大学博物館学講座運営委員会

・大東文化大学博物館学講座だより　第 7 号

駒澤大学禅文化歴史博物館

・震災と復興建築～大正時代の駒澤大学～

武蔵国分寺跡資料館

・武蔵国分寺跡資料館だより　第 17 号～第 20 号
・見学ガイド武蔵国分寺のはなし
・国分寺市の今昔　市制施行 50 周年記念

玉川大学教育博物館

・紀要　第 11 号・第 12 号

・博物館ニュース　SHU　No.42・43

東京家政学院生活文化博物館

・40 年ぶりに目覚めたオートクチュール―P．カルダンとE．ウンガロ―

三鷹市遺跡調査会

三鷹市埋蔵文化財調査報告

・第 34 集　羽根沢台遺跡・羽根沢台横穴墓群

実践女子学園

・館報　第 12 号　2014 年度

〈神奈川県〉

女子美術大学

・女子美　No.178 ～ 180

女子美術大学美術館

・インドネシアの布―島々の記憶―　女子美染織コレクション展 Part3

・拝啓、美術様。

・女流画家の歩み

・四季をめぐる

・アンコールのヴィーナス―BAKU 斎藤の視線―

・インドネシア染織品　女子美術大学美術館所蔵品目録

・年報　第 10 号　平成 23 年度・第 11 号　平成 24 年度

・刺繍をまなぶ

横浜市歴史博物館

・横浜市歴史博物館ニュース　No.36・No.37

大磯町郷土資料館

・年報　平成 25 年度

・大磯町合併 60 周年記念写真集　風景写真から見る大磯の移り変わり

・Report―大磯町郷土資料館だより―　No.35

〈山梨県〉

山梨県立考古博物館

・山梨県立考古博物館だより　No.78・No. 79

・掘り起こされた音の形―まつりと音具の世界―

〈長野県〉

明治大学黒耀石研究センター

・資源環境と人類　第 4 号

・広原遺跡群発掘調査概報Ⅱ

箕輪町教育委員会

・大垣外遺跡　堰下遺跡

・箕輪遺跡

茅野市教育委員会

・八ヶ岳通信　No.32

長野県埋蔵文化財センター

・信州の遺跡　第 5 号・第 6 号

・かがみちゃんと学ぼう　ジュニアこうこがく　第 3 号

〈静岡県〉

東海大学社会教育センター

・年報　No.41

東海大学海洋学部博物館

・海のはくぶつかん Vol.44 - No.3・No.4、Vol.45 - No.1・No.2

・年報　No.42

〈愛知県〉

南山大学人類学博物館

・紀要　第 32 号・第 33 号

〈滋賀県〉

高島市教育委員会

高島市文化財調査報告書

・第 22 集　高島市内遺跡調査報告書―平成 25 年度―

・第 23 集　馬塚古墳発掘調査報告書
・第 24 集　日置前遺跡発掘調査報告書

〈大阪府〉

豊中市教育委員会

・豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成 24・25 年度

かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会

・交流する大学ミュージアムを目指して　―関西における文化遺産の継承―　大学の扉を開く　2014 実施報告書
・交流する大学ミュージアムを目指して　～関西における文化遺産の継承～　平成 26 年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

〈京都府〉

鋳造遺跡研究会

・鋳造遺跡研究資料 2013
・鋳造遺跡研究資料 2014

京都工芸繊維大学

・加賀蒔絵と京蒔絵―工芸教育の精華―　京都工芸繊維大学アートマネージャー養成講座企画　Step Ⅲ
・大学は宝箱！―京都・大学ミュージアム連携の底力　出開帳 in 東北

同志社大学歴史資料館

・館報　第 17 号

〈兵庫県〉

関西学院大学博物館

・和鏡にみる技と心　高精細画像による文化財研究第 3 号
・聖なる光に照らされて　聖書から生まれた美
・Gift for the Future 未来に贈る 125 年

〈山口県〉

山口大学埋蔵文化財資料館

・年報　平成 22 年度
・山口大学埋蔵文化財資料館通信　第 24 号　てらこや埋文　平成 26 年　春号
・山口大学ＭＬ連携事業報告書　平成 25 年度　展示テーマ『再生』

〈高知県〉

高知県立歴史民俗資料館

・岡豊風日　第 85 号～第 88 号
・年報　No.22

〈福岡県〉

西南学院大学博物館

・西南学院大学博物館ニュース　Volume 18 ～ 20
・研究紀要　第 2 号
・海路―海港都市の発展とキリスト教受容のかたち―
・ジュダイカ・コレクションⅢ　祈りの継承―ユダヤの信仰と美術―
・年報　第 6 号

九州産業大学美術館

・九州産業大学美術館年度報告書　No.6

筑紫野市歴史博物館

・年報 14　平成 24 年度

〈熊本県〉

熊本大学五高記念館

・館報　第 2 号

〈鹿児島県〉

鹿児島大学総合研究博物館

・News Letter　No.34 ～ 36
・年報　No.12

立正大学博物館年報 13

（平成 26〈2014〉年度）

平成 27（2015）年 4 月 30 日　発行

編集・発行　　立正大学博物館

〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL. 048 - 536 - 6150 FAX. 048 - 536 - 6170

E - mail：museum@ris.ac.jp

URL　http://www.ris.ac.jp/museum/

印刷・製本：光写真印刷株式会社